

このように、ズィヤーのイスラーム化政策は、政府主導の体系的な、そして全国的なイスラーム化の動きであった。これは、権力の名のもとに強制力を伴って実施されたため、宗教界を含め、各地で多くの反発を生み反動が起こった。イスラーム復興運動の中心的な役割を果たしてきたマウドゥーディーや、ジャマアテ・イスラーミーをはじめとするイスラーム諸勢力は、ズィヤー政権のイスラーム化政策に対して警鐘を鳴らしてきた。(p.114)

事実は全く逆で、最晩年のマウドゥーディー個人およびジャマアテ・イスラーミーが、軍事クーデターにより民主的に選ばれた政府を転覆し、民主的に選ばれた首相であるブットーを死刑に処し、恣意的なイスラーム化政策を推し進めたズィヤー政権の誕生および初期の政権運営に加担した事実はよく知られている[Nasr 1994: 188-196; 山根 2011: 86]。クーデターを通じて誕生した軍事政権が恣意的に「権力の名のもとに強制力を伴って実施」したイスラーム化政策に加担したという事実は、マウドゥーディーの思想がもともと持つところの、国家の主権が神にあるとしたら実際の政権運営は誰が行うのかという部分をめぐる恣意性・危険性があながち理論上にとどまらず実際的な問題であることを露呈している。20世紀ムスリム世界が生んだ重要な思想家であるマウドゥーディーについての数少ない邦文献の一冊である本書が、マウドゥーディーの思想が持つ危険性への言及を避け、その危険性が表面化した事件については誤った記述を行っていることは残念である。

以上、問題があると思われる諸点について述べてきたが、本書はウルドゥー語によるイスラーム関係文献(とくにタフスィール)とその歴史的な出版状況についてのパイオニア的な書物であり、そこに含まれる知見は今後の我が国におけるウルドゥー語、南アジアにおけるイスラーム、およびパキスタンをめぐる研究の礎となるものである。著者のさらなる学究の成果を期待しつつ筆をおきたい。

<参考文献>

山根聡 2011 『4億の少数派——南アジアのイスラーム』 山川出版社。

Nasr, Seyyed Vali Reza. 1994. *The Vanguard of the Islamic Revolution: The Jama'at-i Islami of Pakistan*. Berkeley: University of California Press.

Pandey, Gyanendra. 1990. *The Construction of Communalism in Colonial North India*. New Delhi: Oxford University Press.

(拓 徹 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科附属南アジア研究センター客員准教授)

服部美奈『ムスリマを育てる——インドネシアの女子教育』(イスラームを知る 20) 山川出版社 2015年 106頁

「ムスリマを育てる」というトピックは、イスラームと教育、イスラームとジェンダーをいう二つの大きな研究分野にまたがる、イスラーム研究・ムスリム社会研究において非常に重要なテーマである。しかしながら、これら二つの領域における研究の急速な発展に比して、ムスリマがどのように育つのか、という問いに関する研究は驚くほど少ない。

このように指摘すると、「イスラーム教徒の女性の教育」に関する研究は多いのではないかとと思われるであろうが、「イスラーム教徒の女性の教育」というテーマと、「ムスリマを育てる」というテーマは、似て非なる関心に基づくものである。前者のテーマは、イスラーム教徒という属性を持つ女性に対し、いかに教育、より具体的には近代的学校教育の機会を保障するか、という問題関心である。アフガニスタン復興支援や、マララ・ユスフザイ氏のノーベル賞受賞といった日本でも注目された出来事を背景として、イスラーム教徒の女性がいわゆる日本人の思いうかべるような「教育」をうける機会を制限されているという問題は、多くの研究や報道を通じて一般の人々にも伝えられるようになっていく。

これに対して「ムスリマを育てる」というテーマは、イスラーム教徒の女性が、どのようにしてイスラーム

ムの教えを理解し、ムスリマとしての自己を確立していくのかという関心に基づくものである。現代においてこの問題は学校教育とのかかわりを抜きにして語ることは難しいが、娘をいかによいムスリマとして育てるか、女性がいかによいムスリマとして生きるべきかという問題意識は、学校教育が存在しなかった近代以前の社会においても、ムスリム自身の関心事であったということができよう。しかし、このような視点でムスリマの教育を論じた書は、少なくとも日本語ではないといつてよい。

このような中で、本書は、「イスラーム社会の中でムスリマがどのように育ち、また、教育を受けて成長していくのかを、インドネシアを中心に」(p.1) 考察したものであり、全体が「ムスリマ自身の受け止め方」(p.1) に留意して書かれている。本書は「女子教育」という副題がついていることから、「イスラーム教徒の女性の教育」について関心を持つ読者が手にする機会が多いと思われるが、そうした読者に「ムスリマから見た、ムスリマとして生きるための『教育』とは何か」という新たな視点を提供する上で重要な意義を持つといえよう。

本書は、「ムスリマたちとの出会い」と題された序と以下の4章からなる。

- 第1章 イスラーム的な人間形成
- 第2章 イスラーム改革運動と女子教育の歴史的展開
- 第3章 女子教育の発展
- 第4章 ムスリマの教育を変革する

序では、著者の問題意識とその出発点が端的に述べられている。著者がインドネシアのムスリマと出会ってまず驚いたことは、メディアで伝えられるイメージとは異なる、彼女たちの「華やかでいきいきとした姿」(p.1)であったという。社会で活躍する彼女たちは、イスラームの教えから離れるのではなく、それを「人生のかけがえのない指針」(p.2)としていることから、彼女たちがイスラームにおける女性としての規範をどのように解釈して生き方を形作っているのかを描くことを目指したという。このように、実際にムスリマと接触する中で芽生えた疑問が出発点になっていることは、上述のような「ムスリマから見た『教育』」を論じるための重要な基盤となっていると考えられる。序ではこれに続いて、東南アジアにおけるイスラームとジェンダーに関する主な先行研究が概観されている。

第1章では、ムスリマの教育を考える前提として、幼少期の宗教学習と産育儀礼を例としてイスラーム的な人間形成のありかたが論じられる。インドネシアのムスリムの子どもは、まず7歳ごろから12歳ごろまで、モスクに付設された教室などで、アラビア文字やクルアーン朗誦、礼拝などの初歩的なイスラーム学習を行う(p.7-8)。この段階は「ブンガジアン・クルアーン」と呼ばれ、「良きムスリムを育てる学習の基礎」となるものである(p.8)。より高度なイスラーム諸学を学ぶ段階は「ブンガジアン・キターブ」であり、主に「プサントレン」と呼ばれるイスラーム寄宿塾で行われる。

子どもの成長に関連して行われる様々な産育儀礼もまた、ブンガジアン・キターブと同様にムスリムとしての人間形成に深い影響を及ぼす。本章では新生児の誕生直後に耳元で礼拝の呼びかけ(アザーンとイカーマ)の文句を唱える儀礼、生後七日目の儀礼、割礼、クルアーン修了式の四つの儀礼が、参与観察に基づいて論じられている(p.11-18)。これらはいずれもイスラームの儀礼としてムスリム世界で広く行われているものであるが、特に生後七日目の儀礼とクルアーン修了式の記述と写真には著者の主な調査地であるスマトラの文化が色濃く反映されていて興味深い。これらの幼少期の宗教学習と儀礼には、知識の追求や善行への報いにおける男女の平等と同時に、「コドラット」という概念であらわされる神が男性と女性のそれぞれに与えた先天的な特性(p.2)が反映されている。

第2章では、オランダ領東インドでイスラーム改革運動が活発化した1910年代から30年代における、女性組織の設立と女子教育に関する議論の展開が論じられる。20世紀初頭のオランダ領東インドでは、植民地政府による学校の普及と、イスラーム改革運動の影響を背景に、女子教育が推進された。イスラームの教えに反しない近代の在り方を模索する中で、イスラームが定める性役割の中で女性の進歩が可能であることが再認識され、女性の地位向上の重要な方法として女子教育が進められたのである(p.35)。

1923年に設立された近代的女子イスラーム学校「ディニア・ブトリ」は、こうした女子教育の先駆的存在

となった。ディニア・プトリでは、女性がイスラームの思想を学び、家庭や学校、社会の様々な場で教育者として活躍する女性を育成することを目指していた。こうした女子教育の目的は、学問を追求することが男女の区別なく義務とされることと、「母としての女性の高貴性」(p. 48)を強調するイスラーム改革思想によって支えられていたが、ディニア・プトリの事例は「母としての女性」の役割を家庭内にとどめず、社会における教師としての役割にも拡大して解釈することで、「職業人としての女性の生き方も神の意にそったムスリム女性の一つの生き方」(p. 50)として位置づけた点で革新的であった。

第3章では、現代のムスリマの教育について、イスラーム寄宿学校における教育の様相と、インドネシア社会全体における女性の選択肢の拡大という二つの観点から論じられている。イスラーム寄宿塾は、アラビア語で書かれた「キターブ・クニン」と呼ばれる宗教書を使い、共に学ぶ学生と寝食をともにしながらイスラーム諸学を学ぶ独特の教育空間であり、インドネシアにおけるイスラームの知の継承に重要な役割を果たしてきた。いわゆる「伝統的」な学習の場ではあるものの、インドネシアでは学校教育の普及によって減少されるのではなく、むしろ学校教育の普及とともに増加しており、一般科目の教育を統合した形態や、地方出身の大学生などの寄宿舎を兼ねた形態など、時代のニーズに柔軟に対応して多様な形態を生み出している。

こうした寄宿塾の約95.2%は女子部を擁しており、女子の教育機会と選択肢の拡大に貢献している(p. 55-56)。その前提は、イスラームにおける知識の追求は男女の別なく義務とされるということであるが、一方で寄宿塾における教育には様々なジェンダー・メッセージが含まれている。例えば、女子生徒の安全を確保するため男子とは異なる学習環境や規則が作られていることには、ムスリマとしての行動の規範が暗示されており、また学生たちの母のような存在である寄宿塾主催者の妻の行動や生き方は、ロールモデルとして特定のムスリマ像を提示している(p. 60-64)。さらに、学習に使用されている古典的宗教書には、様々な形で男女の相違が書かれており、その中には女性の地位を男性より下に位置付けるものが多いという(p. 58, 72-76)。1990年代以降、このような宗教書におけるジェンダー・バイアスを更正する取り組みが行われており、これについては第4章でより詳しく述べられている。

第3章の後半では、インドネシア全体の近年の就学・進学傾向をジェンダーの観点から見るための統計データが示されている。まず関心を引くのは後期中等教育、高等教育において全体で女子の割合が男子より高い傾向にある点である。ムスリム女性は教育機会が制限されている、という前提でこの本を手にした読者には、この部分から読んでインドネシア全体の女子教育のイメージをつかむことをお勧めしたい。その上で興味深いのは、教育段階が上がるごとに、女子が一般学校よりもイスラーム学校を選択する割合が上がっているというデータである。この理由については、思春期の女子のためにより安全な環境として親がイスラーム学校を選ぶ傾向があること、そしてムスリマに好まれる職業の一つであるイスラーム学校の教師になるための進路として選択されていることが挙げられている(p. 68-69)。

第4章では、ムスリマの教育を変革し、インドネシア社会でジェンダー構成を実現するための様々な活動の例として、第3章でもふれられた古典的宗教書の再解釈を行うNGO、高等教育機関やジェンダー関連の研究所、インドネシアにおけるイスラームに大組織であるムハンマディアとナフダトゥル・ウラマーのそれぞれの若手女性組織等の活動が挙げられている。

この中で高等教育機関に付設された研究所やムハンマディア若手女性組織については、主に西洋のフェミニズム言説をインドネシアのコンテキストとイスラームの教えに合う理論として発展、普及する活動が主に紹介されている(p. 81-88)。

一方、ナフダトゥル・ウラマーの組織ではイスラーム寄宿塾主宰者とその妻を対象にジェンダー・センシティブティに関するトレーニングなどを行っており、その内容は夫と妻の仕事の分担における不平等や、夫が妻の仕事を認めないなど、社会の中で女性が直面するジェンダーの問題を意識化し、預言者の妻の言行などイスラームの教えに言及しながら認識を改めるといったものである。

これに対し、章の始めと終わりで扱われている「改革」の事例は、イスラーム寄宿塾で教えられる古典的宗教書を現代のコンテキストにおいて再解釈し、「ジェンダー公正の視点を含めた新しいイスラーム法をつくり出す」(p. 80)試みである。本章では、これらの異なるタイプの活動の紹介を通じて、イスラーム寄宿塾を含むインドネシアの女子教育の全体で、ジェンダー公正に向けた取り組みが進んでいることを示している。最後にイスラームの教えの基本は男女の平等性であり、男女の役割分担はあっても、女性に対する差別

はイスラームに内在するものではなく、「インドネシアのムスリマたちは歴史的な偏見を修正し、新たな解釈を生み出そうとしている」(p.100)と本書を結んでいる。

以上に明らかなように、本書はブックレットという制限の中に、イスラームの思想、フィールドワークから得たデータ、統計等のデータをバランスよく盛り込み、「ムスリマを育てる」というテーマについてインドネシアの具体的事例から鮮やかにイメージできるように配慮されている。だが、ここで示されたのは、著者の長期にわたる丹念な調査に基づく考察のごく一部である。特に第2章で論じられた近代初期のイスラーム改革思想とディニア・プトリの事例は、著者によるこの学校での長期の住み込み調査に基づいて書かれた著書『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動の中の女性』に詳細に記載されている。本書で興味を刺激されたならば、ぜひ合わせて読んでいただきたい。

隣国マレーシアのイスラーム教育を研究対象とする評者の視点から気になった点をあえて一つ挙げるならば、第3章と第4章で比較的多くのページが割かれている「古典的宗教書を現代のコンテクストにおいて再解釈しジェンダー・バイアスを更正する」という取り組みの位置づけについてである。このような取り組みの代表的人物としてマスダル・マスウディを挙げ、代々ウラマーの家に育ち、イスラーム寄宿塾出身の彼がNGO「イスラーム寄宿塾社会開発協会 (P3M)」を設立し、ジェンダー・バイアスへの意識をイスラーム寄宿塾の関係者に浸透させる試みを行っていることが紹介されている (p.78-80)。

このような記述からは、古典的宗教書の再解釈という取り組みが、伝統重視の立場と矛盾しないような形で生み出されてきたかのように見えるが、はたして「多くの、普通のムスリム」にとって受け入れられるようなものであったのか。例えば、しばしばこうしたムスリム社会におけるジェンダー言説の重要なコンテクストとなる諸外国からの圧力や資金の流入について、Bruinessen は P3M が 1990 年代からフォード財団の支援を受けて「女性に優しいイスラーム法学」等の大型プロジェクトを実施していたことを指摘している [Bruinessen 2011: 29]。こうした欧米の資金に支えられた取り組みを多くのムスリムはどのようにとらえていたのだろうか。

最後に、本書は冒頭に述べたように、「ムスリマからみた教育」について知ることができる貴重な日本語文献であるが、英語では近年少しずつこのような視点での研究が出版されてきている。例えばインドネシアについては、イスラーム寄宿塾の主宰者の妻たちからみた教育を論じた [Srimulyani 2012]、マレーシアについては都市の成人女性にとってのイスラームを学ぶことの意味を論じた [Frisk 2009] 等が、ムスリマにとってのイスラームを学ぶ意味に深く切り込み、様々な角度から論じている。ムスリマとしての教育と生き方は、イスラームへの確信を軸としながらも社会の変化を柔軟に受け入れながら変化し続けている。本書のように、こうしたムスリマの視点からみたイスラームと教育の問題を社会的コンテクストの中で読み解く研究は、国際的にも今後増えていくことが期待される。

<参考文献>

- 服部美奈 2001 『インドネシアの近代女子教育——イスラーム改革運動の中の女性』 勁草書房。
- Bruinessen, Martin van. 2011. *What happened to the Smiling Face of Indonesian Islam? Muslim Intellectualism and the Conservative Turn in Post-Suharto Indonesia (RSIS Working Paper no.222)*. Singapore: S. Rajaratnam School of International Studies Singapore.
- Frisk, Sylva. 2009. *Submitting to God: Women and Islam in Urban Malaysia*. Copenhagen: NIAS Press.
- Srimulyani, Eka. 2012. *Women from Traditional Islamic Educational Institutions in Indonesia: Negotiating Public Space*. Amsterdam: Amsterdam University Press.

(久志本 裕子 マレーシア国際イスラーム大学言語マネージメント学部講師)

伊東未来『千年の古都ジェンネ——多民族が暮らす西アフリカの街』昭和堂 2016年 x+248+6頁

本書はジェンネ(マリ)についての詳細な民族誌であり、本書を読めば、ジェンネの街の全てが分かる、